

王蒙《青春萬歲》に見える第一次五ヶ年計劃

——工業生産を巡る情報交換を中心に——

高 屋 亞 希

§1 情報交換

1953年に始まる第一次五ヶ年計劃は、共産黨政權下での本格的な重工業生産の開始を告げる、政策轉換のメルクマールとなっている。この政策轉換に軌をあわせて、マスメディアは鞍山製鐵所での生産状況等、國家主導の工業生産プロジェクトに関する情報を、盛んに報道し始める。

この時期の北京の女子高校に舞臺が設定されている、王蒙の長編小説《青春萬歲》でも、學生達が工業生産に関する情報を、各種のメディアを通じて収集し、その情報を互いに交換しあう場面が、幾つか挿入されている。學生達が相互に交換する情報は、マスメディア情報の單純な反復であり、新しい「内容」が付け加えられているわけではない。そもそも工業生産の國家プロジェクトに関する情報は、マスメディアの報道を受信する全ての人に、平等に開かれている。従って、互いに情報交換する學生達の間では、質量ともに差異のない情報が等しく共有されていた、と言えるだろう。各々の學生達が所有する情報「内容」が均一である以上、情報交換する學生達の關係は、水平な相互性に基づいていると考えてよいかも知れない。しかし、全ての人が等しく情報を共有しているとするならば、何故、學生達は饒舌にその情報を反復しようとするのだろうか。

情報交換は、「表現」という行爲としても、見ることが出来る。學生達はマスメディアを受信して収集した國家プロジェクトに関する情報を、「自分」達の喜ばしい成果として、再び具體的な別の人間に向かって、發信し直している。言い換えると、工業生産を巡る情報の受信者であった學生達は、相互に情報を交換する際には、収集・所有した情報の發信者へと、「自分」の主體位置

を變換しているのである。「自分」という主體位置は、非「自分」、即ち他者との關係によって、その境界線が設定される。つまり、マスメディアの情報を同型反復するに過ぎない學生達の行爲にも、「自分」と他者との境界線を設定する力學が、作用していることになるだろう。ならば、情報を發信する「表現」行爲に、その都度、「自分」と他者との境界線がどのように引かれているのか、と問う必要があるだろう。つまり、情報「内容」の均一性を理由に、情報交換する學生達が相互的關係にあるとする解釋は、情報「表現」という一回的な行爲の結果を、事後的に圖式化したものに過ぎないことになる。

本稿では工業生産を巡る情報交換を、「表現」行爲という視座から考えてみたい。それは、「表現」としての工業生産が、社會システムのなかでどのように機能しているのか、という点について検討することでもあるだろう。

§2 遊戯としての情報交換

1952年12月31日夜、第一次五ヶ年計劃の開始を記念して、全校を挙げた年越しの祝賀會が催される。この祝賀會にあわせて、學生會では“全ては偉大な祖國のために”というテーマで展覽會を企劃する。展覽會は具體的なテーマによって、3つのパートに分かれている。第1パートが鞍山製鐵所の建設を主題とする“祖國の大規模な建設の先觸れ”，第2パートが朝鮮戦争の戦果や英雄の事跡を取り上げた“最も敬愛すべき人を支援する”，第3パートが自校の學生の學習成果や課外活動で製作した工藝品を展示した“科學の砦を攻め落とす”（122頁）である。テキストの主要登場人物の一人、楊蕾雲が第1パートの責任者であったことから、高3のクラスメートのほぼ全員が、その展示資料の収集に協力することになる。

學生達は各種の新聞・雑誌といったマスメディアを通じて、鞍山製鐵所に關する情報を受信して、収集する。しかしこうしたマスメディアの情報は、受信の機會という点から見れば、全ての人が平等に受信することが可能であり、且つ簡単に共有し得るものであったことは重要であろう。というのもこの展覽會自身が、情報を發信するメディアとして想定されているにも関わらず、その展示情報の「内容」は、基本的にマスメディア情報の反復でしかなく、展覽會の見學者が既に所有している情報と、何ら差異がなかったからである。つ

まりこの學生達の展覧會は、情報發信のメディアとしては、相對的に貧困なものでしかなかったことになるだろう。

事實、展覧會の見學者の大半が、意見簿に展覧會への社交辭令的な贊辭を書き連ねる中で、見學客のひとりが“〔展示〕内容の充實さに缺ける”(127頁)と書いて、展示情報の「内容」の貧困さを露呈させる。この意見を見た楊蓄雲は、女子學生を輕視した男子學生の意見と解釋し、展示情報の「内容」の貧困さを、意識から消去する。だが蓄雲の意識操作のすぐ後で、テキストの敘述が“實際、内容は多くはなかった”(127頁)と、蓄雲の意識操作を異化してしまう。そもそもこの種の貧困さは、第1パートの展示「内容」に限らない。例えば“科學の砦を攻め落とす”という、工業生産の時代に相應しいテーマを掲げた第3パートの展示「内容」が、せいぜい自校の學生達が學習した成果、即ち課外活動等で製作した工藝品でしかないという事實が、敘述で明かされている。その意味では、展覧會という情報發信メディアは、圖らずも工業生産の時代に於ける學生達の相對的に貧困な位置を、提示していたことになるかも知れない。そもそもこの學生達が、工業生産の現場から豫め排除されていたことは、注意する必要があるだろう。何故なら、工業生産の情報に関して、學生達は何らかのメディアを通して情報収集する受信者でしなく、決して一次情報の發信者にはなり得ないからである。情報所有を巡る學生達の貧困は、社會構造的に規定されていたことになる。

だが、構造的に受信者の役割を擔わされた學生達が、展示情報の受信者に対して、單にマスメディア情報の反復に止まらない、特別な情報を發信する機会がなかったわけではない。展示情報の貧困な「内容」を明示することによって、蓄雲の意識を異化した敘述は、そのすぐ後で、例外的に見學者の注目を集めた展示品があったと告げる。1つは鞍山製鐵所の労働者から贈られたシームレス鋼管、もう1つは朝鮮戰爭の志願兵から贈られた落下傘である。まずシームレス鋼管という展示品を収集した経緯について、検討する。

彼女達〔=鞍山製鐵所の情報を収集している學生達〕は鞍山の労働者に手紙を書いた。袁新枝〔=高3の積極分子の學生〕が指導している少年先鋒隊中隊では〔手紙の他にも〕更に、子供達が注意深く摘んだ花の種を送って、手紙で鞍山製鐵所の様子を知らせて欲しいと頼んだ。返信の方は一通、また

一通とすぐに届いた。労働者達は、〔手紙の返事をくれただけではなく〕その上、年内にシームレス鋼管の模型を贈って、年賀の贈り物にしようと承諾してくれた。この知らせに全校がどよめきたち、皆でこの喜ばしい出来事について語り合った。（122～123頁）

學生達は私信というメディアで、工場労働者から個人的に製鐵所の情報を収集しようと試みている。しかし、前述した展覧會の見學者の反應から推測する限り、労働者からの返信によっても、マスメディアを通じて収集した以上の情報「内容」を、特別に引き出せたようには考えられない。またテキストでは特に言及はないものの、シームレス鋼管についても、既にマスメディアで報道されたことがある、と考へてもさしつかえないだろう。しかし、労働者からの返信によってもたらされた鞍山製鐵所の情報が、既知の「内容」であったこと自體、學生達にとって問題ではなかったと思われる。と言うのも、返信やシームレス鋼管を受け取った學生達は、労働者と個人的な關係が発生したことの方に感激しているように、見受けられるからである。この點は、學生達がシームレス鋼管を新たな「内容」の情報としてではなく、労働者から個人的に贈られた“贈り物”と位置付けていることから伺える。従って敘述が特筆した、シームレス鋼管の展示情報としての價値は、マスメディアを通さずに、労働者との個人的關係を利用することによって、他の一般の人には入手できない、より生産現場の一次情報に近い情報の獲得に成功した、ということに盡きるだろう。勿論、この特權的な情報の入手とは、學生達の錯覺によるものであり、現實には大半の人にとっても既知の情報「内容」に過ぎなかったのは、前述した通りである。

一般的な問題として、個人的回路を通じて、他の人には接近、収集し得ない情報を受信することは、その情報から遮斷されている外部の者に對して、優越性を發生させる。こうした關係外部への優越性は、逆に個人的回路で情報を交換する、關係内部に對する歸屬意識を生む。こう考えると學生達は、労働者から個人的に授與されたシームレス鋼管を展示することによって、「自分」達が鞍山製鐵所の生産現場に直結する集團のメンバーである、と集團外部に向けて「表現」していたことになるだろう。この際に注意すべきなのは、構造的には依然として、學生達が受信者の位置に置かれ、發信者である工場労働者とは、

非對稱的な關係にあったことである。つまり、労働者との個人的な關係を特權視し、關係外部への優越性を「表現」することと引き換えに、學生達は工場労働者との非對稱的な關係を、暗黙のうちに承認していたことになる。下級生の少年先鋒隊隊員の一人が、文通していた兵士から贈られたという落下傘が、外部の見學者に對して優越性を「表現」していたのも、事情はシームレス鋼管の場合と、全く同じであろう。

麗々しく展示されているシームレス鋼管を目の前にして、同じ學校の學生が“これが、あの鞍山の？本物なの？”(127頁)と議論し合う。これに對する蕃雲の反應は、些か過剰である。“鞍山の労働者がわざわざ贈って寄越したものののに、どうして偽物だと言うわけ！”(127頁)と息巻く。疑義を表明した學生の意圖は不明である。ただ、問題のシームレス鋼管は“今朝 [=12月31日] よりやく受け取ったので、皆ひどく焦ったものだった”(127頁)というテキストの設定を考えれば、この學生の疑義は、鞍山からの送付が展覽會の開催に間に合った本物か、或いは複製で間に合わせたのか、という意味に解釋するのが、適當のようにも思われる。いづれにしても、展示情報の「内容」の眞偽ではなく、情報を提供してくれた労働者との、個人的關係の存在の眞偽を疑われたかのような蕃雲の反應は、かなり恣意的な偏向を孕んでいると思われる。

個人的關係を通じて情報を受信することを特權視し、この關係に參與し得ない他者を、特權に預けられない劣位に位置付ける。つまり工業生産についての情報交換を巡って、學生達の認識では、一種の階層秩序が想像的に設定されていることになる。こうした階層秩序を要件にすることで、學生達は「自分」達が特權的な情報に與かっていると錯覺し、この特權の外部に在る者に對して、優越性を「表現」する。この「自分」達の優越性を表明する「表現」にも関わらず、實際には、學生達は貧困な「内容」の情報を再發信しているに過ぎず、結果的にマスメディア情報が反復されてしまう。情報交換による工業生産の時代への参加が、ある種の官僚制度的な情報の再分配を要請、且つ承認してしまうことは、注目に値するだろう。

學生達は、贈り物の〔シームレス鋼管の〕ことだけでなく、鞍山製鐵所の全てを語りあった。毎朝、北京人民放送局の女性アナウンサーが親しみ深く人を感動させる聲で、學生達に對して鞍山で起きた出來事を述べた後、全校

の學生が自發的に立ちあがって、熱のこもった拍手をした。その後、教室や廊下、食堂の至る所で〔こんなことを〕話し合っている人達が出た。“覚えて？鞍山製鐵所を建設する設計用紙は何トンでしょう？”“そうですね、あの螺子釘一本だけで何トンもするのよ。”〔……〕（123頁）

單にマスメディアを受信することによって獲得した情報「内容」を、特權的な關係を利用することによって贈與された情報だ、と錯覺する學生達の認識パターンは、この場面でも繰り返されている。何故なら、學生達はラジオ報道で鞍山についての情報「内容」を収集するのみならず、情報を提示するラジオのアナウンサーの聲に、「自分」達に對する“親しみ深く、人を感動させる”響きを聞いているからである。こうしたアナウンサーへの親近感、アナウンサーとの個人的な關係を想像し、「自分」達に特別に情報を提供してくれた、という學生達の錯覺なしには、生じ得ないものだろう。

このラジオ報道を受信した後、學生達はこぞってマスメディア情報を反復的に再発信している。學生達は先ず、繁雜な數値を含む情報「内容」を暗記し、互いにその記憶を試そうとクイズを出し合う。クイズというのは、情報を収集する、更には暗記によって情報を蓄積する過程で生じる、情報の所有量や正確度、鮮度を相互に競い合う形式である。つまりこの場面も、多分に遊戯的色彩を帯びているとは言え、學生達は各「自」が所有する情報「内容」の優越性を競い、相互に想像的な階層秩序を設定し合っていたことになる。情報交換を「内容」という点から見れば、學生達はマスメディア情報の「内容」を、單調に反復しているに過ぎない。しかし、學生達は情報を巡る階層秩序を設定することによって、その都度、他者に對する「自分」の優越性を「表現」していたことになるだろう¹⁾。

勿論、ここでの階層秩序の設定は、一回的、且つ相對的なものに過ぎない。この展覧會やクイズが、所詮は學生達の遊戯に過ぎない所以でもある。しかし遊戯が終わり、學生達は再び、工業生産とは無關係の日常生活に戻らなければならない。ここで、新たな問題が生じる。主として、學習という行爲によって構成される學生達の日常生活は、如何にして工業生産の時代に歸屬する「自分」達の優越性を、「表現」し得るようになるのだろうか。

§3 情報交換の非對稱性

人民共和國にとって、1953年は工業生産開始の年として表象されるにも関わらず、工業生産に従事している者の割合を考えれば、個々の國家成員の大部分は、それとは無縁の生活を送っていたことになるだろう。《青春萬歲》の學生達にとっても、學習を主要課題とする普段の生活が、1953年を境に急に變化するわけではない。ならば、とりたてて變化のない學習生活を送る學生達が、1953年を迎えた途端、工業生産の時代に「自分」達が歸屬していると認識するためには、どのような「表現」が必要なのだろうか。1952年12月31日、授業の最後に一人の年輩の化學教師が、學生達に向かって、その「表現」を口にする。

來年——、明日から五ヶ年計劃が實施されることになりました。[……] 私は化學工學を學びましたが、舊社會では〔私が〕工業を建設しに行く場所はありませんでした。私は何度かの新年を迎えてきましたが、私はそのいつれの年にも、國家富強の希望を見ることは出来ませんでした。しかし1953年は！皆さん、あなた達は幸運ですよ！[……] きちんと化學を勉強しないなどということが、どうして出来るでしょう？ロマンソフも、化學は今や生活のあらゆる領域に伸びてきた、と言っています。あなた達は酷い目にあったことがないので、今日の幸福な學習條件を大事にするということがわからないのです。青年時代は最も貴重で、最も時間に餘裕がありません。一日中、我關せずで過ごしていても、あっというまに過ぎ去ってしまいます。あなた達は、1分1秒をしっかりと握み、力を振り絞って學び、事にあたらなくては いけませんよ！[……] (125~126頁)

工業生産を巡る情報の提示として、この教師の臺詞を検討してみる。と言っても、§2のマスメディア情報の「内容」が、鞍山という現在の生産状況についての報道であったのに比して、この教師による情報「内容」が、工業生産を取り巻く未來の状況についてのものである點に、氣付かされる。即ち翌1953年から大規模な工業生産の國家プロジェクトが開始される以上、未來には學んだことを生かせる就職ポストが確保されているだろう、という推測を前提にした情報と言えよう。この化學教師による情報が興味をひくのは、學生達が送る現在の學習生活は、現在の工業生産に結び付くのではなく、近未來の工業生産の

状況にこそ直結する、という視点を提供していることである。つまり、未来には工業生産の就職ポストが用意されているので、そのポストを獲得するために、現在のところは学習に専念することこそが、學生達の個人的な利益に結び付くという「内容」の情報を、この教師は発信していると思ふべきだろう。

だがそれならば、教師の推測通り、學生達が未来では個人的利益を獲得できるにしても、とりあえず学習に勵まなければならない現在の「自分」達の生活が、優越的なものだと思ふことはあり得ない。何故なら、この種の優越意識が成立するには、「自分」達より劣位にある他者の存在が要件となるにも関わらず、教師が提示する情報「内容」に従う限り、未来の就職ポストを獲得する機会、学習に専心する國家成員に、平等に開かれていることになるからである。実際に利益を獲得できるかどうかは未定であり、しかも獲得の機会が平等に全ての成員に與えられているだけならば、そうした機会の付與自体は、他者に対する優越性にはなり得ない。學生達が「自分」達を、工業生産の時代に歸屬するエリートだと認めるためには、教師が提示した情報「内容」に、別の操作を加える必要がある。

この情報を、學生達への具体的な提示の仕方、即ち「表現」の視座から見ると、エリート意識を創出する仕掛けがどのようなものか、理解できる。先ず教師は過去という時代をも、工業生産が欠如していた時代と位置付けている。勿論、実際には多様な状況に満ちていた筈の過去を、工業生産の欠如という一點に還元することは、恣意的な偏向だと言えよう。にも関わらず、教師が「自分」の體驗、即ち當事者の一次情報として、過去について言及しているため、受信者である學生達は、この過去についての情報の當否を検討する権利を、豫め奪われていることになるだろう。その上で教師は、学習が個人の利益獲得に全く結びつかなかった過去と、利益獲得に直結する現在との“学習条件”を比較する。そして、学習が利益獲得と密接に結合する現在に、優越性を認めている。つまり利益獲得の機会とは、決して均等に分配されているのではなく、機会そのものが存在しなかった過去が、對照されているのである。こうして現在の學生達は、單に利益獲得の機会を保有しているという要件のみで、過去に對して優越性を確保するのである。

だがここで言う過去とは、機会の有無を機軸として、單純に1953年で分節し

た歴史的時間を指すのではない。この化學教師は、未來の工業生産を巡る利益獲得の場から、「自分」が排除されていると、學生達に向かって羨望を「表現」している。ここで教師が言及する排除とは、二重のものである。一つは既述した、工業生産が缺如していた1953年以前の過去は、學習が個人的な利益獲得に結びつかなかった、という點である。そしてもう一つは、“青年時代が最も貴重だ”という教師の位置付けから、學習が利益獲得に結合するという原則は、學習者全員に無制限に適應されるのではないことが、暗に示唆されている點である。つまり利益を供與される資格には、一種の年齢制限があり、年長者は參入を拒まれている、と教師は「表現」していることになるだろう。従って1953年以前に學生時代を過した年長者は、過去のみならず現在に於いても、利益を獲得する機會から排除されてきたのであり、存在自體が過去の遺物として認識されていることになる。こうした二重の意味で、利益獲得の機會から排除された、年長者という他者を要件とすることによって、學生達は「自分」達が特權的に機會を付與された、工業生産の時代のエリートだと認識することが可能になる。ただ、この教師の「表現」はやや具體性を缺くので、テキストの他の箇所而言及される、年長者の羨望「表現」についても、検討してみる。

1953年1月1日の始まりを告げる時報の後、校長が演臺に上がり、全校の學生達に向けて挨拶をする。

[……] 包頭では新しい製鐵センターを建設するという事です！皆さん、私達の工業基地、私達の製鐵センターは1つ、2つに止まり得るものではなく、10、20、50、100個近くも建設することでしょう！[……] 皆さん、私は皆さんが羨ましく思います。あなた達は將來全員、第二、第三の五ヶ年計劃の建設に参加することでしょう。工業、鑛山、田畑の到る所あなた達を待っているポストがあるでしょう！偉大な建設を目の前にして、私は特に自分の知識の貧困さを感じ、残念にさえ思います。私は本當にもう一度高校生になって、代數、物理、語學や工學、トラクターの運轉を學んで、自分が祖國の新たな歴史的段階に於いて、もっと有用になれたならと眞に願っています。しかし、もし假に私が[高等]學校を受験しても、結局のところ、申し込みをさせてはくれないのです。(彼女 [=校長] は振り向いて政治指導員に尋ねた。“私もまだ高校生になれますか？” 政治指導員は微笑みながら首

を横に振った。“年齢がオーバーしていますね”。講堂中が笑いに沸いた。）仕方ありませんね。私にはあなた達のように勉強する好条件を得ることは出来なくなっていました。しかし私はがっかりしていません。皆さん、私は皆さんに挑戦します！様々な科学の知識を戦争の環境の中で私はとっくに捨て去り、すっかり忘れてしまいました。今最初から復習し、学び直したいと思います。皆さん、一緒に競争しましょう。どちらがより多く学び、國家に對してより有用であるか！（134～135頁）

校長が提示する工業生産を巡る情報は、前述の化学教師のものと同型反復である。但し、未來の工業生産では多くの就職ポストが確保されるという推測の根據として、具体的に現在の包頭で生産施設の建設が進行しているという情報を持ち出している点は、注意する必要がある。と言うのも校長は、包頭の生産現場で働く夫からの私信を情報源としているからである。つまり校長の夫は、現在すでに工業生産でポストを確保し、一次情報を発信し得る位置にいたことになる。現在の工業生産を巡る情報交換に於いては、生産から排除されている學生達は構造的に受信者でしかあり得ず、校長夫妻の側が発信者として、階層秩序の上位を占めていたことが、この場面で改めて顕在化すると言えよう。

また校長は、利益獲得の機会からの排除についても、より具体的な例を挙げている。先ず1953年以前の過去については、化学教師が工業生産の缺如を理由に挙げていたのに對して、校長は参戦によって學習を放棄したことを挙げている。“戦争という環境の中で捨て去”ったという記述だけでは、戦争被害によって學習する条件を奪われた、と解釋する可能性もないわけではない。しかし、校長が戦争時期から黨活動に参加した生え抜きの幹部であるという設定や、學習または就職の機会を“捨て去った”⁽³⁾と、主體的な行爲として把握していることを考えれば、参戦するために積極的に利益獲得の機会を放棄した、と解釋するのが適當と思われる。社會的條件の制約という受動的契機を挙げた非黨員の化学教師に比べて、黨員の校長が戦闘へ参加する主體的契機を強調しているのは、興味深い。次に1953年以後の未來についても、入學に伴う年齢制限によって、學校での學習機会、ひいては利益獲得の機会から排除されていると位置付けて、學生達の“好条件”を羨望する「表現」を発信している。この場面でも、現在の學生達は利益獲得の機会を付與されているという要件だけで、年長者に

よる羨望の対象として、「表現」されていることになるだろう。

だが注意を要するのは、化學教師と校長による情報提示のいずれの場面においても、機會を保有する學生達の優越性、即ちエリート意識が、年長者による羨望の「表現」を反轉することでしか導出されていない、という點である。これらの場面において、學生達はどれも受信者の役割を甘受し、年長者による羨望「表現」に、歡聲をあげて賛意を示すばかりである。つまりこれら年長者による、工業生産を巡る情報交換の場に於いて、學生達は階層秩序の劣位に置かれたまま、ついに情報の發信者の位置に轉換されることはない。學生達は現在に於ける受動的な承認によって、未來に於ける「自分」達の優越性しか、「表現」し得ないのである。

この理由は、簡単に推測できる。利益獲得の機會から排除された劣位者として、年長者が設定されているが、實際にはこの校長夫妻のような年長者こそが、現在の情報交換に於ける階層秩序の上位者であるため、學生達が劣位者に向けて「自分」達の優越性を誇示する「表現」は、可視化されることはないからである。つまり現在の工業生産から排除されているのは、決して年長者ではなく、年少の學生達の方だった、という現實の情報交換に働く政治的力學が、學生達に沈黙を強いていると言えるだろう。状況を定義する力を廣義の權力と呼ぶならば、現實の情報交換の場を統御していた年長者の方が、學生達に對して權力を行使していたことになる。

1953年1月1日の全校祝賀會で、年長者と學生達は共に、工業生産の時代の到來を祝福する場に集う。しかし、この兩者の關係は、決して對等なものだったわけではない。情報交換の視座から見ると、年長者が年少の學生達に向けて、一方的にその未來を羨望し、その羨望「表現」を學生達が受諾する、という非對稱的な關係だったことが伺える。ならば、構造的な受信者の位置に置かれた學生達は、どのようにして發信者へと轉身するのだろうか。

§ 4 情報交換を巡る制度的認證

高3の學生の中で唯一の黨員でもある鄭波は、卒業した先輩に向かって、1953年現在では學生数が400人から1000人以上にまで擴大し、學校設備もそれにあわせて擴充したこと(265頁参照)を、誇らしげに解説する。鄭波が誇示する

學校規模の擴大は、“解放以後，學生數が何倍も増加し”（322頁），解放以前に比べ，就學機會の普及が進んだことに對應している。このことは，學習による利益獲得の機會を，限られた少數者の占有に任せるのではなく，より多數の者に與えていこうとする，國家成員間の平等化を目指した，政策の反映と見ることもできよう。だが逆の見方をすれば，中等教育機關の學生という資格自體が，これまでで不平等の下に分配されたものであることを，示唆しているとも言える。《青春萬歲》の主人公に設定されている，解放以前に入學した高3の學生達について言えば，就學機會に預かれなかった他の多數の存在が想定されるべきで，彼女達の學生という資格そのものが，同年齡集團の中で不平等に分配されたものだと考えられる。その意味では，學習によって利益を獲得する機會も，豫め平等に分配されていたわけではない，と言うことになるだろう。テキストでは，この點に關する意識が完全に缺落しているが，とりあえずはテキストと共犯關係を結び，讀み進めていくことにする。

とは言え，學生という資格を持つ者全員が，學習の機會を平等に保有していたとしても，それだけでは具體的な利益獲得には結びつかない。何故なら，「自分」達が學習によって習得した情報を利益獲得に動員する，即ち學生達が知識情報の發信者となるためには，個人レベルでこの知識情報を蓄積し，體内化するしかないからである。勿論，學校で習得する知識情報の「内容」は，特定の個人に占有が許されているわけではなく，原理的に學生全員が所有できる。しかし知識情報を實際に所有するには，例えば，“高校で3年ほど學んだ大部の教科書，講義や筆記ノートをめぐるって，懸命に讀み，暗記し，演算し”（317頁）たりというように，結局は個人的な達成にかかっている。そのため，知識情報を収集・蓄積する過程で，個々の學生達の間には，情報の所有量や質的な精度を巡って差異が生じてしまう。學習を知識情報の交換という視座から見れば，懸命な努力を払った學生達が獲得した知識情報の「内容」は，基本的には教科書や講義という，學生全員が共有し得る「内容」のものに過ぎない。暗記という行爲に集約されるように，學生達が發信する知識情報の「内容」は，既知の情報の單調な反復だったことになる。

だがこの交換を「表現」行爲として見るならば，知識情報をより大量且つ正確に蓄積し得た學生は，相對的に少量或いは不正確な蓄積しか達成できなかった

た學生に對して、「自分」の優越性を「表現」していることになる。利益獲得の機會の下に平等だった學生達は、實際には、學生集團内部で相対的な優劣を競いあい、成績という階層秩序の中に位置付けられることでしか、利益獲得を實現できなかったのである。

このように読んでみると、社會主義國家の下での工業生産に参加すべく、参加に必要な専門知識を修得しようと、大學進學を希望する高3の學生達を描いた《青春萬歲》は、工業生産賛歌とは異なった、凄惨な様相を帯びてくる。《青春萬歲》では、計3回の校内試験と最終的な大學入試が、設定されている。小説の全編を通じて、學生達はこれらの試験に戦々恐々とし、またその都度、試験成績を巡る階層秩序での「自分」の位置に一喜一憂している。つまり學生達は、階層秩序での「自分」の相対的な優劣を引き受け、或いは妥協することによって、はじめて工業生産への参加の切符を、手に入れるのである。

小説の終わり近く、大學入試を控えた高3の學生達は、「自分」個人の進路を巡って思い悩む。成績優秀とは言えない吳長福は、大學での専攻を決めかねて悩む周小玲に向かって、その悩みが贅澤だとなる。

私なんか、何の學科でも、何の學校でも、どこでも、入れる大學さえあれば、ああ佛様、それで結構！だけど私の成績は〔大學に合格する〕最低のレベルに足りているのかしら？まずいことに、今年はその上、學校を受ける機關幹部が3萬人いるし。おしまいだわ、私じゃ受かるわけないわ、受かるわけ…… (318頁)

第一次五ヶ年計劃という政策を支持し、社會主義下で始まった工業生産への参加を夢見る學生達は、現實には、無様な姿を呈している。周小玲も“私達、高校の卒業生は、〔大學で〕何を學んだらよいのか分からないし、その上大學に受からないのではと心配したり、焦りで頭がもう割れそうよ。”(318頁)と、吳長福に同調する。ここに見える學生達は、成績によって階層化される現實の「自分」の位置と夢とに折り合いをつけながら、辛うじて「自分」の進路希望を決定している。進路希望、即ち工業生産へ参加する個人設計圖も、豫め制度的場に囲い込まれることで、成立していることが確認できるだろう。

一應確認すべきことは、學校で習得する知識情報については、學生集團の外部者が、個々の學生が所有する情報の量や精度を、試験という形で制度的に認

證することである。制度的というものは、ある一時點の、多分に恣意的な基準によって認證された、個人の知識情報の所有狀況が、固定的な成績評價や學歷資格として客體化されてしまう、という意味のことである。換言すれば、制度的な認證を経ることによって、知識情報の所有を巡る階層秩序が實體化し、本來は相對的なものでしかない學生個人の優劣關係が、構造的な優劣へと固定化するるのである。従って、§2で検討した遊戯的な情報交換と、ここでの知識情報の交換は形式的には同じものであるが、前者が互いに想像的な階層秩序を設定する、流動的な關係性を基盤にしているのに對して、後者は制度的認證によって物象化された、固定的な關係性の上に成立している。このような制度的認證を受諾することによって、學生達は工業生産の時代へ參加するのである。

§5 情報交換を巡る國家分配

制度的認證によって固定的な階層秩序が形成されるのは、何も學校という教育機構内部、或いは各教育機構間だけでのことに止まらない。と言うのも、學生達の最終目標である就職ポストの間にも、嚴然と優劣が存在しており、成績評價や學歷資格という制度的認證が、よりよいポストを獲得するのに、不可欠だったからである。

留學豫備部への校内推薦が決定した楊蕃雲は、クラスメートの鄭波に「自分」が獲得した幸運を、喜んで報告する。鄭波は動搖と沈鬱な氣分を押し隠し、“極力平靜に”（322頁）蕃雲を祝福し、「自分」は大學進學を取りやめた、と告げる。

“〔……〕私、先生になることになったのよ。”彼女は無造作に、且つ簡單〔な調子で〕話せるようにと、少し言葉を切った。“政治指導主任が私にこう言ったの。解放以後、學生の数が何倍も増えたのに、教師は非常に少なく、不足している。そこで今年、教育局では少數の高校卒業生を引き留めて、中學校の教師にすることに決めたって。政治指導主任が私の意見を求めたので、私は残ることに同意したの。”（322頁）

§4で言及したように、解放以後の學生數増加という情報については、かつて他ならぬ鄭波が口にしてしている。この情報は學習機會、ひいては工業生産で就職ポストを獲得する機會を、より多數の者に與える例證として、その機會を豫

め奪われている年長の卒業生に向かって、現在の「自分」達の幸運な學習條件が、誇らしげに「表現」されていた。しかし今、かつてと同じ情報「内容」を反復する鄭波は、留學によって優位な就職ポストを獲得する機会に恵まれた蓄雲に向かって、橋梁建築のポストに就職する機会を断念し、教師という相對的劣位のポストをあてがわれた、「自分」の失意を「表現」する立場へと、追い込まれている。鄭波の平靜が意識的に装われたものであることを、敘述が明かしてしまっている以上、中學教師というポストへの就職決定が、鄭波にとって不本意なものであることが伺える。更にこの決定を聞いた蓄雲も、“そんなの不公平よ！ [……] 運命はあなたに對して苛酷にすぎると思うわ” (323頁) と言っていることから、中學教師というポストが劣位にあるという認識は、鄭波の主觀的な認識に止まらず、一般的なものだったことが推測される。利益獲得の機会のもとに平等だった二人の學生のうち、一人が教師という相對的に劣位のポストを分配される。これによって、國家分配の名目のもとに、二人の構造的な優劣が、最終的に決定されてしまう⁽⁴⁾。

學生達が各々、別の進路を歩み始める一步手前、《青春萬歲》は終わる。つまり《青春萬歲》というテキストは、大學進學、或いは就職を巡る國家的認證によって、個々の學生達を構造的な階層秩序に分配する、最終決定を待つ迄のモラトリアムに、成立していたことになるだろう。情報交換を巡る構造的な優劣関係が決定した瞬間、學生達はもはや、互いが水平な相互性に基づいた友情を交換できないのでは、と危惧し始める。“もし私達が [卒業して] 別れたら、やはり同じように仲の良いお友達でいられるかしら、それともだんだんと関係を失って……” (324頁) と、蓄雲は不安を漏らす。多分、この蓄雲の表明する不安こそが、テキストにはついに書かれることになかった、第一次五ヶ年計劃に参加する、《青春萬歲》の學生達の未來を、先取りしていたのである。

註

本稿の考察、及び拙譯による引用は、1979年5月人民文學出版社版に基づき、引用頁は本文中の括弧に數字で記載した。

- (1) 《青春萬歲》には、もう一つの展覽會場面がある。1953年5月4日、學校では卒業生との情報交換の場が設定される。この時、アトラクションの一つとして、自治會活動を初めとする、解放戰爭當時の學生達の“戰闘”に関する展覽會が、催される。“戰闘”への参加體驗を持つ、高3で唯一の黨員鄭波が、展示品につ

いて解説していること等から、この展覧會が、“戰鬪”の當事者である鄭波等の一次情報、或いは共に“戰鬪”に参加した友人・先輩との個人的關係を利用して入手した特權的な情報を、他の“戰鬪”に参加しなかった展示見學者に向けて、發信していたことが推測できる。テキストでは、この展覧會のための情報収集の過程について、全く言及していない。見學者の反應についても、彼らが“嚴肅な感情を抱いて”（264頁）展示品に向き合っていることが、敘述から伺えるだけである。この展示品との距離感を伺わせる敘述と、見學者の反應の無さから、受信者が“戰鬪”に関する展示情報を客體化していると、考えられる。工業生産を巡る展覧會場面とは對照的に、見學者にとって、“戰鬪”を巡る情報は「自分」達の成果として授受されていないことが、讀みとれるだろう。この二つの對照的な展覧會場面は、工業生産の時代に於いて、“戰鬪”情報がどのように交換されていたのか、という興味深い問題を投げかけている。

- (2) 工業生産の場で就職ポストを獲得することを、「個人的利益」を獲得する行為と見做すことについては、説明が必要かも知れない。學生達の認識レベルでは、工業生産への参加は社會主義建設への貢獻ととらえられている。このことを理由に、工業生産の場での就職ポストへの學生達の關心を、「個人的利益」とは關わりのない、「無私無欲」なものだとする解釋も有り得るだろう。しかし學生達は、第一次五ヶ年計劃期になって初めて、この時期に社會的注目を集め始めた工業技術者になることを希望し、華々しい活躍をする非凡な「自分」を夢見るのである。社會的に注視されていない、中學教師等の平凡なポストは、就職を考える際に、彼女達の關心の對象になっていない、という點は見逃せないだろう。（テキスト263～264頁、321～324頁等参照）つまり學生達の、工業生産の場に就職することへの關心は、社會的空間に於いて他者に對して優越的位置に「自分」を置こうとする、「個人的利益」獲得への關心と無縁なものではないことになる。また社會主義建設への「無私無欲」の貢獻、という學生達の主觀的な認識自體も、社會に於いて客觀的にプラス價值として認定されていることを考えれば、工業生産の場に就職することへの關心は、二重の意味で、「個人的利益」と結びついていたことになるだろう。
- (3) 原文は、“各種科學知識、在戰爭環境中、我早就扔下了”。
- (4) “戰鬪”の時代には、鄭波が黨員という優位に立ち、消極分子に對して權力を行使していた、というテキストの設定を想起するならば、彼女が劣位の就職ポストを分配されたことは、皮肉な構成だと言えるだろう。工業生産の時代に於いて、積極分子が優位性を喪失した問題については、拙稿『王蒙《青春萬歲》に於ける戰士イメージの轉換——「解放」から「生産」へ』（1995年2月、早稻田大學大學院文學研究科紀要別冊第21集文學・藝術學編）を参照されたい。